

子どもの言葉の発達と母親の関わり

——前言語的コミュニケーションを中心とした事例研究——

近藤 万里子* 佐々木 沙和子** 星山 麻木***

* 帝京短期大学こども教育学科 ** 明星大学大学院教育学部研究科後期課程 *** 明星大学教育学部

要 旨

本稿では、ASD診断のある対象児Aが言葉を話し始めるまでの過程を、母親の語りから描き出した。前言語的コミュニケーションを中心とした言葉の発達の経過を追い、Aの言葉の発達と母親の関わりを中心に考察した。その結果、母親の関わりとして、くすぐり、マザリーズやAの理解しやすい言葉を使った語りかけ、気持ちの代弁、Aからの働きかけへの応答、細やかな観察という5つの働きかけが見られた。

キーワード：前言語的コミュニケーション、言葉の発達、母親

I はじめに

言葉の発達には様々な必要要素がある。言語聴覚士の中川¹⁾は、言葉の獲得には、聴力、聴覚弁別力、知的能力、記銘力、発声・発語にかかわる運動機能、注意を向ける力、共同注意、模倣、伝達意欲など多岐にわたる能力が必要であるとしている。

そのうちの1つでも欠けると言葉というものは育たない。これは次のような障害から知ることができる。ASD（自閉症スペクトラム症）はコミュニケーションを主とする障害である。

ASDの診断基準の1つに社会的コミュニケーションおよび相互関係における持続的障害が挙げられており²⁾、次の3点によって示される。1. 社会的・情緒的な相互関係の障害。2. 他者との交流に用いられる非言語的コミュニケーション（ノンバーバル・コミュニケーション）の障害。3. 年齢相応の対人関係性の発達や維持の障害。

これらの点が、コミュニケーション力と関わる共同注意や伝達意欲が未発達であったことと関係して考えると考えられる。ここでいう共同注意とは、お互いが共通のものに注意を向けている状態である。これはコミュニケーションの基礎となる自己-物-他者の三項関係が形成されていることを意味する。

また、ASDは発達障害の1つであり、発達障害とは個人内の能力差に偏りがあるという特徴を持つ³⁾。対象児AはASDという特性から、偏りのある発達を示し、言葉に必要な共同注意や伝達意欲といったコミュニケーションに関する要素が他の要素に比べ著しく未発達であった。しかし、Aの母親の継続的な関わりにより、Aはコミュニケーションの力を伸ばし、初語へ

と至った。コミュニケーションは周囲の環境との相互作用によって培われる。Aにとって最も近い環境とは母親であった。

言語が未だ獲得されていない段階を前言語的段階とし、その段階におけるコミュニケーションを前言語的コミュニケーションと呼ぶ。これは、注視、発声、しぐさなどの非言語的な手段を使って、意図の伝達や、相互的な伝達を行うこと指す。この前言語的コミュニケーションについてはBates⁴⁾によって論じられている。また、前言語的コミュニケーションの発達と母親の関わり的重要性については毛利⁵⁾が指摘している。

そこで本研究においては、Aと母親との関わりを中心に、Aの言葉の発達の過程を前言語的コミュニケーションの部分に主眼を置いて見ていく。その結果を踏まえ、コミュニケーションに困難を抱える子どもの言葉の発達とそれを促す養育者の働きかけについて明らかにしていく。これは、母親のみならず、保育者等の子どもの言葉を育てる全ての人にとって意義ある研究であると考えられる。

II 対象児Aについて

対象児Aはインタビュー当時、特別支援学校に通う8歳の男児であった。Aは2歳4ヶ月の時にASDの診断を受けた。兄弟は弟が1人。

Aは言語発達の社会的コミュニケーションに関わる部分において困難が見られたが、園の年中になると言葉が現れ、年長において一気に増加した。

Ⅲ 研究方法

1. データ収集方法および調査時期

研究参加者は対象児Aの母親である。2017年2月に1時間に渡り、半構造化インタビューを実施した。インタビュー内容は研究参加者の同意を得てICレコーダーに録音した。インタビュアーはこの親子の療育に長年関わってきた研究者Bである。インタビュアーは言葉が出るようになった過程ときっかけ、母親の関わり方等について尋ねた。

2. データ分析方法

録音した内容は逐語録に起こし、研究目的を念頭に置きながら何度も読み返し、言葉の発達に関する語りを抽出した。そして「母親の関わり方」に関して、後藤⁶⁾のナラティブ分析方法を参考にして分析を行った。次に言葉の獲得に至る過程における関わり方を明らかにするため、母親の関わり方とAの言葉の変容について考察した。

3. 倫理的配慮

対象児Aの母親への研究協力の了解を得て、承諾書に署名をしてもらった。尚、本研究にあたっては明星大学通信教育部の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

Ⅳ 結果と考察

Aの能力の偏りを母親の語りから見ていく。Aは、早期に文字への興味を示し、理解していたとされる。以下はAの母親が語った内容である。

Aは、言葉を話すということよりも前に、文字に、数字に、一番最初は数字ですね、数字に興味を示して、その後アルファベットに興味を示して、その後、ひらがな、カタカナですとか、文字にもものすごく興味を示していますね（中略）アルファベットも、もう2歳ぐらいで全部読めていたんですね。ひらがな、カタカナも2、3歳、もう3歳の時には全て記憶していて、話すよりもまずもう、読めてしまう。あー、順序が逆だな、おもしろいなって

またAは視聴覚機器からの音声を模倣することもできた。しかし「話す」ことはできなかった。

DVDとかの中でもAは聞く力がものすごく強くなっているのは昔から思っていて、DVDも音として、全部、全コピーしている感じでセリフを言ったりですと

か、歌もそうですね、歌も音なので、音として記憶していて、歌っているAを見ていたりすると、あれ、喋れるんじゃないって錯覚するぐらい歌の中では、音楽の中ではしゃべれてる・・・でも、普段の会話はむしろかしいんですけど

これらのことから、文字の理解に必要と考えられる知的能力、記憶力、そして音声の模倣に必要な聴力、聴覚弁別力、記憶力、発声・発語にかかわる運動機能、注意を向ける力は獲得していたと考えられる。しかし、母親に対して意志を伝えようとする行動は見られなかったようである。

Aは周りの子供がよくやってるって話を聞く、手を引っ張るとか、そういうのを全然しない子だったので、なので、本当に分からないことが多く、もう全て、視線、表情、言動とか、もうそれのみでしたね。本当に難しく、細かい誰も気づかないところで、わーっとなったりするので、それでもわからない、っていうことだらけだったので、もうほんと毎日苦しい日々でした。

上記の語りに表現されるように、Aには母親に何かを伝えようとする様子が見えず、母親はAの理解に困難を持っていたことが分かる。このような語りからもAは中川が示した言葉の獲得に必要な力のうち、共同注意、伝達意欲については未発達であったことが伺える。

これらのようにAの能力には偏りがあった。以下、伸びの少なかった力を緩やかな速度で育てていったAの姿を母親の視点から4つの時期に分け、考察していく。

1. Aの気持ちが読み取れない時期

Aはずっと言葉が出ていなく、ただ、喃語、ごによごによした赤ちゃんのような言葉っていうのは、すごい小さい時からいっぱいあって、本当にこの子は、おしゃべりになる子なんだなーと、感じるぐらいすごくよく喃語は出ていたんですね。ま、それが大体あーあーあー、って、あーっていう言葉、がすごく多くて、あーっていう言葉で色々な嫌な気持ちだったりとか、ま、大体嫌な、パニックがとて多かったので、嫌な言葉をすごく、嫌なときにあーあーって言うのが多くて、

Aがパニックを起こしたり、嫌だと感じているときに喃語が頻出していたことから、喃語という言葉の始まりが、Aの負の感情を表現するために使われている

と母親は感じていたことが分かる。それがAの不快感を表すものであることは母親に理解できた。しかしその原因については理解が難しかった。

インタビューア：（発語の）その前のところっていうのはどうしてたんだろう。言葉じゃない、ところのA君からの発信・・・

母親：はい、これはもう、表情・・・大体が怒り・・・怒りだったり怖いっていうそういうので、身体全体ですね、表情、涙、あの、身体全体で激しく動いたりとか、んー、後は、あー、言葉になってしまいますけど、あーあー、っていうので、なんで、読み取るのがすごく大変でした。なんで嫌がっているのかっていうのは、本当にあの、相当の読み取る力がこっちに必要になってくるので、こっちに必要性、がすごくあったので、そこは日々、Aのことを観察していました。もう一日中観察していて、でない、大変になってしまいますので、わからないと大変なので、わかるために、理解しようと一日中、細かいところも見ていました。

Aが不快感を感じていることは読み取れるが、その原因が分からないがために、Aから不快感を取り除いてあげることができない。それは母親に、声や全身を使って激しく不快感を訴えてくる子どもに何もしてやることのできない無力感や苛立ちを感じさせていたのではないだろうか。そこで、母親は「観察」し読み取ること集中するようになる。

「わからないと大変なので」という言葉から、Aの不快感の原因が理解でき、それを取り除くことができれば、Aの不快感の表現は治まっていたことが分かる。つまり、観察によってAを理解することが、Aの不快感の表現を母親が理解し、Aのためにそれを取り除くという1つの関わり方になっていた。この時期においては、細やかな観察と読み取りが母子の関係を築く鍵であった。

すごく丁寧に関わってきましたね。過ぎてしまったあとでも、あの時のあれはなんだったんだろうって後で振り返ってそれをわかるまでにまた、何日も何日も日々観察したりとかして、それも時間はかかりましたけれども、とにかく観察はすごいしていました。

観察がAとの関係を作る数少ない関わりであると気付いた母親は、振り返りや継続した観察を行う等、熱心に観察に取り組んだ。

インタビューア：助けて欲しいときに、（中略）例え

ば手を引っ張ったりとか、（中略）自分の意志を、まあ伝えるというよりはやってもらいたい、切実に、っていうようなことってあったかなって思うんですけど、何か覚えていらっしゃいますか？

母親：そうですね、Aは周りの子たちがよくやるって話を聞く、手を引っ張るとか、そういうのを全然しない子だったので、なので、本当にわからないことが多く、もう全て、視線、表情、言動とか、もうそれのみでしたね。本当に難しく、細かい誰も気づかないところで、わーっとなったりするので、それでもわからない、っていうことだらけだったので、もうホント毎日苦しい日々でした。

前述したように、母親が観察の中心としたのはAの視線、表情、言動であり、Aから母親へ訴えかける行動はなかった。つまり、この段階において、Aの中に母親に対して訴えかけようとする行動がなかったことが分かる。Aはただただ、自分の不快感に忠実に行動し、母親はその行動からAを理解しようとしていた。しかし、Aからの情報は理解しづらいことが多く、これほど必死に理解しようと努めているにも関わらず、理解できないことに「ホント毎日苦しい日々」であったと語っており、母親にとってAの行動の原因や意味を理解できないこの時期が最もつらい時期であったと考えられる。しかし母親はそのつらさに飲み込まれることなく観察という関わり方以外にもAに対して積極的な関わりを行っていた。

関わり方としては、あの、とにかく、たくさん笑ってもらおうっていうのは意識していましたね、で、すごく、例えば、こちょこちょこちょってくすぐったりとかは、すごくよくして、やっぱり、言葉を話すということよりも、まずは、楽しいっていうのを先に感じさせてあげたいなっていうのを思っていて、なのでほんと、こしょこしょこしょって、そういう時は自然と笑顔になるじゃないですか。なので、ま、笑顔で接していて、Aはまだその時は、あんまりまだ最初は反応がなかったんですけど、ずっと繰り返してきて、で、それで、気持ちの共有、ですね。

Aからの表出は不快感であり、その理由を解決することができなければ、母親には無力感だけが残ってしまっていた。そこで、母親は意図的にAから快の表出を増やす関わりを試みている。その関わりでは、最初は反応が乏しかったが続けることによって徐々に笑顔を見せるようになってきた。そしてそのことが「気持ちの共有」に繋がっていったと母親は感じている。

2. Aの気持ちを理解できるようになる時期

気持ちの共有をすごい大事にしてきました。なので、遊んでいるときでも、もう楽しいっていうときに「楽しいね」っていうのを言葉にして、毎回毎回言っていたりとかして、あとは、「やったー」とか、あの、「できたね」とか、「せいかーい」とか、何かもうそういう風にたくさん言葉を言ってきたら、だんだん、だんだんと、本当に「やったー」っていうのが、少しずつできてきたりとかして、なので最初は、楽しいっていうことから、それがきっかけで気持ちの共有っていうのがきっかけで、言葉の共有っていうのは楽しいものなんだっていうのを、Aに感じてもらったのが、きっかけだったんじゃないかなっていうのはすごく思います。はい。

母親はAの気持ちを共有することを大事にしていた。ここでの母親の指す「気持ちの共有」という言葉の使い方について考えたい。母親はAの気持ちを理解し、そしてそのAの気持ちを言葉にしてAに見せていた。Aがこの時点において母親の気持ちに目を向けていたかどうかについての語りはない。ここにある「気持ちの共有」とは母親からAに向けての一方の共有である。つまり、Aが母親の気持ちを共有していたということではない。ただ母親が「気持ちの共有」と表現するように、母親がAの心に触れることができてきたのがこの時期であったのだろう。母親がAの気持ちを読み取り、その気持ちを代弁する。それを見てAは、その気持ちのときに、その母親が使っていた言葉を使い、気持ちを表現する。この一連の行動は、Aがなぜ不快になっていたのか分からず苦悩していた母親にとって、母子間の絆を感じさせる喜びとなっていた。

3. Aと繋がったと感じる瞬間が見られた時期

インタビューア：(共感を促すことを)意識している中で、あ、今つながったなって2人の心がつながるってこのことだったんだなっていう、何かそこ覚えていますか？

母親：そうですね、最初のときは、あ、つながったなっていう時は、視線だったり表情だったり、行動だったりとか、そういうので反応が笑顔になったとか、そういう時に、意識が通じたなっていうのは感じました。それが言葉として出てくるのには時間はかかりましたが、やっぱりそれは、ほんと繰り返し、繰り返ししていく中で、ぽっと自然に出てきたというのが年長さんの時ですね。

ここで母親は「意識が通じた」という言葉を使っ

ている。Aの気持ちを理解し、その気持ちを代弁する関わりをしていくうちに母親の「意識が」Aに「通じる」ようになってきたのである。それはAが「言葉」として表現する前の段階、Aが視線や表情、行動で表現し始めた段階から始まっており、母親の意図を理解し始める様になってきたことが語られている。

それが「言葉」を介して現われたのがどのような瞬間であったのか、どのような言葉であったのかを次に見ていく。

母親：そうですね、一番最初は、あの、んー、その時は、通園施設「X」に通っていたので、結構「X」で何かが終わったときに、「バイバイ」「おしまい」というのがすごいあったので、その二つは、最初に入りましたね。「バイバイ」と「おしまい」、あとは、そのうちに、例えば先生とかが、あのAと接してて、何かちょっとあれ違うかなっていう時に「あれれ〜」っていう言い方をしていたんですね。そういう言い方、音の・・・

インタビューア：イントネーション？

母親：はい、そういうのAは大好きだったんですよ、音でAは言葉を覚えている感じが私はずーっとしていたんですね、言葉を覚えるというよりも、音で覚えていたので、そういうイントネーションがある方が入りやすくて、そういう言葉は比較的早く入りました。

前述した「意識が通じる」という語りを踏まえると、言葉が「入りました」という母の言葉は、「バイバイ」「おしまい」「あれれ」という言葉を伴った大人からの働きかけをAが捉え、視線・表情・行動でなんらかの反応を示し始めたことを意味していることが分かる。

また、特にイントネーションがある言葉はAにとって捉え易かったようである。そして、Aは言葉の持つ意味に気付くようになる。

物には名前があるって気づいた時点があったんですよ、もうそこから言葉に関してものすごい興味を示していったので、すごいAの中にもぼんぼん、ぼんぼんたくさん入っていきました。

物と言葉がAの中で結びついた瞬間が初語へのきっかけであったのだろう。ここでこれまで母親が投げかけてきたものは単なる音ではなく意味のある音であったことに気が付いたのである。既に初語を発するためのその他の力は育っていたAはこれまでの言葉のなかった時代を取り戻そうとするが如くに言葉を吸収していくようになる。

このようなAの変化の裏には母親の継続した関わりがあった。その例を以下に示していく。

本当に、何か些細なことでも、返すっていうのはすごい意識していて、一日中名前を呼んだりしていて、段々なんか、もういいよってすごくなってくるんですけど、できる限りあの時期は返してあげたいって、思っていて、その（言葉の）キャッチボールは楽しんだよっていうのを感じてもらいたかったの、ちょっとしたことで「はーい」ってもうそれだけでも言いし、「んー」とかでもいいし、本当に「そうだね」ってそれだけでもいいし、忙しいからやっぱりたくさんはなかなか相手は難しいと思うので、なのでちょっとでもいいので、返すっていうのやっていたね。それでAも嬉しそう表情をしていたので、こっちも返してあげたいなっていう気持ちもありましたし、やっぱり返ってくると嬉しそうにしていたのは、なんか印象的です。

次の語りでは、これまでの語りの中では初めてAから母親への働きかけがみられる。Aが母親に「ママ」等呼びかける。その呼びかけに対して母親は返事をする。するとAは笑顔になり、その笑顔を見た母親はAに対しての愛しさを実感するのである。

まだ言葉になっていない表出の時代にも母親はこの関わりを同じように行っていた。

Aがなんか言葉としては出ていなくても、「なんとなくかなんとかんとか」って言ったときに、その言葉を、Aの言葉を繰り返して言って、「なんとなくかなんとかだよ、そうだよ」っていうのもすごい使っていたので、それもAが後に、「そうだね、そうだね」とか、あの「そうだよ」みたいに言うようになったりとか、

言葉として聞き取れないAからの音声も母親は受け止め、Aの音声を真似して返していた。

また、言葉の使い方についても母親の配慮があった。

（Aは音が好きで）CDでたくさん聞いていたりとか、そういうのでCDとかDVDとかの中のセリフを（私が）日常生活で使ったりとか、そうするとAはわかるんですよ、あれだあれだって、結構工夫はしていました。Aにわかりやすく、Aに合わせて言葉を選ぶっていうのはいつも私がしていたことの一つです。

母親はAの理解しやすい言葉を探し使っていた。母

親が常にAの立場に立って考えて関わってきたことが分かる。

そして、これらの関わりが、言葉となって溢れて来る時期へと導く。

4. Aの言葉があふれてきた時期

言葉が出てきたことで人間関係に広がりが見られるようになってくる。

弟とAはまったく同じ空間にいたとしても興味の対象が正反対だったので、交わるということがなくて、（中略）「Aくんと遊びたくても遊べない」とか、「じゃあA君に何か言ってみれば？」て私が言っても、「でも言ったって何もお返事しないもん」ってちょこちょこ言っていたので、やっぱりそこは兄弟間っていうのは悩みの一つとしてずっとあったので、

ここから言葉が出るまでのAの人間関係は母親との関わりのみであり、同じ家族の弟であっても交わろうとはしなかった姿が見える。しかし、言葉によってAと弟の関係が変化してきた。

でも言葉が出るようになったことで、下の子との関わりが少しずつ増えてきて、初めて歌を2人でうたっているときはほんとにすごい忘れられないですけど、感動しましたね。このときが来るとは思ってもみななかったので、あとは3人で歌を歌えたときもすごい印象的で、あの場面も記憶に残っているんですが、Aは、その、音をよく聴く子と先ほども言ったんですが、音に対する感受性がとても高いので、まじわるっていうのがすごく苦手な時期がずっと長くあって、例えばテレビで流れている音楽を私が口ずさむと、大パニックになってしまったんですね。私、音程間違ってるって思ったんですけど、音程を正しくしていても、ものすごく嫌がっていて、何でも交わることを嫌がったので、一緒に歌うってことができなかったんですよ。他の家庭ではごくごくある、ありふれた場面なんですけど、そういうのを見ていると、いつもいいなっていうのをすごく思っていたので、それが3人で歌えたっていうのが、弟と2人で歌っているって言うのが、もうそれはほんと、うちにとっては大きかったので、そういう弟との関わりですね。もう、すごい変化しました。

言葉が出ることで弟とやりとりができるようになった。つまりこれまで「お返事しな」かったAが弟の呼びかけに対して返事をするようになったのだろう。そうして、Aの世界の中に弟が受け入れられるように

なった。そしてこれまで交わることを嫌がり共に歌うことができなかったAが、弟の歌声を受け入れ、共に歌う関係が作られるようになった。

それだけではなく、言葉を話せることはAの心の安定にも繋がった。

自分の例えば嫌な気持ちとかも、まだ年長のときは少し難しかったかな。年長の時はポジティブなときの方が出てきましたかね、まだやったーとか、ネガティブなわーって嫌なときはまだちょっと難しく、で、小学校にあがるときになってからは、あの、嫌だっという言葉が出てきたり、あ、嫌だ、よりもまず、残念ですね、私がよく使っていたんですよ、残念っという。それも役に立つ言葉の一つなんですけど、残念って色々使えるんですね。で、Aに残念だよっというのは使っていなかったんですよ、私自身がAに何かあったときに残念っという風にそれを色んな場面場面で使っていたら、ある時Aが「ざんねーん」って言うようになったときがあって、しかもその時、笑顔で言うように心がけていたんですよ、ネガティブな言葉なんですけど、そこをすごく演技ですよ、演技で、なるべく笑顔で「ざんねーん」って、Aはもうわーってなっているんですけど、それでも落ち着いて「ざんねーん」ってずっと言っていたらAがいつしか「ざんねーん」って言うようになって、でその自分のその言葉で自分自身、A自身が落ち着こうとしている姿が、一年生終わりぐらいかな、のときにあったんですよ。すごいってその時は感動しまして、言葉によって、A自身も言葉によって安定していきました。はい。あと、もちろん周り、私もわかりやすくなりましたし、あの、生活しやすくなりました

Aは言葉の出始めた年長の時期にはポジティブな感情を表現するために言葉を使っていた。就学後には自分のネガティブな感情をも言葉で表現できるようになってきた。ネガティブな感情を言葉に換え、さらに「ざんねん」という言葉を唱えることにより、自分のネガティブな感情を落ち着けようとしている姿が見られるようになっていった。こうしてAの言葉との関わりは成長し続けている。

V 総合考察

1. 母親の語りについて

母親の語りからAの発達していく様を見てきた。健常児の発達過程と比較すれば、欠けている部分も多々ある。しかし、それがASDという特徴から来るものなのか、はたまた母親が回想し語る中で省略されてし

まったためであるのかは更なるインタビューなくしては筆者には知りえないところであるし、母親の記憶から抜け落ちてしまった部分はインタビューを重ねたとしても証明することは不可能である。よって、発達段階としてあるはずのものが語られていない部分については本稿においては言及することは避け、語られている部分についてのみ考察をしていく。

この母親の語りは二重構造を持つ。1つは母親の語りという構造である。母親はAを育てる過程における自分の体験・感情について語っている。つまり、この語りは母親自身の物語という点である。そしてもう1つの構造は、この語りが母親の目を通したAの観察記録となっている点である。母親はAが誕生してから最も多くの時間を共に過ごしてきた相手である。最もAを見てきた観察者である。この半構造化インタビューの質問に対し、母親は自身が観察したその膨大なデータから、質問に関連があり重要であると母親が判断した情報を選択し語った。Aについての観察者は母親であり、さらに母親は第一の分析者なのである。我々はその母親の分析を通した情報を丁寧に解釈し、言語発達を促す重要な要素になるだろう事柄を挙げていった。

2. Aの前言語的コミュニケーションの発達過程と母親の働きかけの全体像

母親の語りによるAの前言語的コミュニケーションの発達過程と母親の関わりを図1にまとめた。「Aの言葉があふれてきた」時期まで時期を3つに分けた。「Aと繋がったと感じる瞬間が見られた時期」では、母親からの働きかけに対してAが反応していたが、やがてAから母親に対して働きかけるようになる。働きかけの順序は図1に英数字によって示した。また、「Aの言葉があふれてきた時期」では弟からの働きかけに対しても応えるようになり、さらに同時期のAと母と弟が重なり合っている図では、これまで人と交わることを避けてきたAが母親と弟と交わってうたうことができるようになったことを示した。

母親の働きかけについてはAに対する細やかな観察が一番の根底にある。この観察によって、どの関わり方が有効であるか母親は考え、効果のあった関わり方を継続してきたからである。

この図1を基にして、母親の関わりがAの前言語的コミュニケーションの発達にとってどのような意味があったのかを詳細に考察していきたい

3. マザリーズ・Aの理解しやすい言葉を使った語りかけ

言葉は生まれて直ぐに出るものではない。発語の下

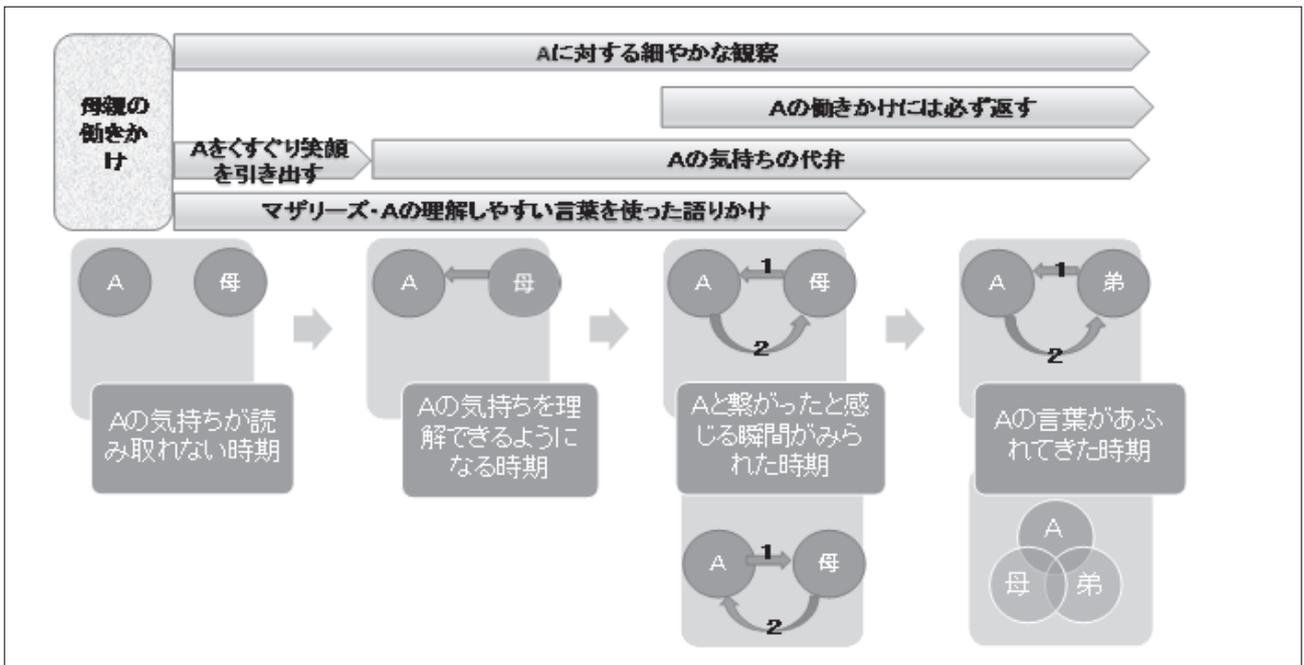


図1 Aの前言語的コミュニケーションの発達過程と母親の関わり

には様々な蓄積があり、その蓄積が言葉を成している。言葉の発生を支える背景としてあるのがコミュニケーション機能、言葉を用いる以前の「前言語的コミュニケーション」である。やまだ⁷⁾はそれを「ことばと共通の機能的土台」とし、「ことばの前のことば」と呼んでいる。生後2・3ヶ月頃は表情やクーイングと呼ばれる乳幼児独特の音声による養育者とのやりとりが行われる。やまだはこれを「うたうコミュニケーション」と名付け、「うたう」ことを「気持ちを合わせ、お互いに響きあい、共鳴しあい、同じ感動のなかに溶け合い」、「息と気をあわせる」ことであるとしている。乳幼児のクーイングや手足の動きに合わせて母親は声を出したりリズムを刻んだりする。乳幼児も母親に対して同じように呼応する。これが「うたうコミュニケーション」である。この時期にマザリーズという、言語が異なっても世界共通で見られる乳幼児に対する養育者の話し方が見られる。児玉⁸⁾によると、マザリーズは子どもの注意喚起のために音程が高く、抑揚も非常に強調されているという。この抑揚の使い方を習得していくことにより、語彙の習得の前に抑揚によるコミュニケーションが可能になり、やがて愛着の対象者である養育者の発する言葉への関心と繋がっていくとしている。

結果の3でAが好んだイントネーションのある「あれれ〜」という言葉は、高いピッチで抑揚のあるマザリーズの機能を持っている。マザリーズのメロディーとリズムの助けによって、乳児は母親や話者の気分や意図を察するようになるとされる。またマザリーズの話し方には乳児の相互同期や模倣を促す効果があ

る⁴⁾。これらは正に「うたうコミュニケーション」と言えよう。これも音楽的要素を持つマザリーズの特徴からであろう。人は音声を、意味を持つ言葉として認識する前に、リズムやメロディーのある音として認識し、その音の持つ快、不快と言った雰囲気を感じることから、人が発する音が何らかの意味を持つことに気づいていくのではないかと考える。よって母親がAと気持ちが繋がったと感じた最初の言葉がリズムやイントネーションを持つマザリーズのような言葉であったことにおいても不思議はない。Aとの関わりとして、マザリーズのようにリズムやメロディーを持つ言葉を使ったことが、音声を単なる音声ではなく、意味ある音声としての認識に繋がったのだと言えよう。

次に、Aの理解しやすい言葉についてであるが、母親はDVDやCDなどAが好んで聴いたり観たりしていたものがAに語りかけるときに有効に働くことに気が付いた。これはDVDの一場面と言葉が一致し易かったのではないだろうか。「バイバイ」と「おしまい」という言葉は比較的早く覚えたと母親は語っている。これと同様に、帰る場面と「バイバイ」という言葉、片付ける場面と「おしまい」の言葉がAの中で一致したのだろう。実際の生活場面の言葉よりもDVDの方が、Aが理解しやすかった理由としては、枠組みのない現実世界よりも画面という枠のある映像世界の場面の方がAにとっては把握しやすかったことと、また何度も寸分違わぬ場面を再生することができたということが考えられる。故に、DVDの言葉は、Aにとって理解しやすい言葉となったのかもしれない。

4. Aをくすぐり笑顔を引き出す

結果と考察の1.からAがパニックを起こしたり、嫌だと感じているときに喃語が頻出していたことから、喃語という言葉の始まりが、Aの負の感情を表現するために使われていたことが分かる。

松村⁹⁾は「乳児は泣くことによって養育者に不快感を知らせ、養育者にそれを取り除いてもらうように情動行動を表出する。」と、泣くという表現が養育者を求めるために使われると述べている。それは乳児が、「泣く」→「養育者が来て泣きの原因を解決してくれる」というサイクルを通してその仕組みを理解していくからである。

母親は、Aの「泣き」や負の感情表出としての「喃語」の原因を読み取ることが「すごく大変」であったと語っている。つまりこの時、「泣く」→「泣きの原因解決」というサイクルを成立させることが困難であったと想像される。原因の分からない子どもの泣きは養育者にとっては戸惑いを生む。陳¹⁰⁾は「泣き」を中心とした母子間の一連の行動とそれに伴う心理的变化は母子双方にとって大きな意味を持っていると述べ、Distress-relief-sequenceという概念を以って説明している。Distress-relief-sequenceとは、子供がなんらかの不都合によって、心理的に窮迫な状況(distress)に陥り、養育者がそれをなんらかの方法で察知し、そのような状況から解放(relief)させるという一連の出来事のことを指す。しかし、養育者が乳児をDistressな状況からreliefさせることができなかった場合、つまり、Aのように泣いている原因の読み取りが難しい子どもである場合、母親はかなりの頻度で子どものDistressをreliefできないことが考えられる。この問題について陳は、Distress-relief-sequenceの一連の事象が繰り返される場合は、養育者は自分が子どもの困難な状況を解除できる存在であると認識できるため、自己の有能性を感じることができると述べている。さらに、子どもとの相互交渉の楽しさから育児を楽しく感じるようになるとしている。しかし、養育者が子どもの困難な状況を解除することができない場合、養育者は自分の有能性を子どもに対して感じることはできない上に、泣き続ける子どもが疲れて泣き止むまで待たなければならないという不快な体験をすることになる。そして、そこに「家庭の環境などに望ましくない悪条件が更に加えられたならば、養育者を育児ノイローゼや虐待など不幸な羽目に追い込むこともある」(Kirkland)¹¹⁾ことが知られている。「読み取るのがすごく大変でした。」と語る母親もこのような不幸に陥らないとも限らない状況であったのではないだろうか。しかし、母親とAの関係はそのような状況にならなかった。そこには母親の工夫があった。それは母親

が、自ら働きかけることによって、原因が分かる表出をAにさせ、Aと関係を築いていったことであつた。

母親がAをくすぐる。Aが笑う。母親はAが笑う原因を知っているため、Aの笑顔の意味を読み取ることができる。だからこそ、母親はAの気持ちを理解できたと感じ、「気持ちの共有」ができるようになったと語っているのであろう。佐々¹²⁾は子どもからの発信に困難がある事例の改善には、あやし行動などの接触体験がきっかけとなると報告している。くすぐるというあやし行動は身体接触を伴い、お互いを知覚・認識する。母親が行ったこのくすぐるという行動は重要な介入のポイントであったことが分かる。

菊野¹³⁾は、まだ言葉が話せない乳幼児が声や身体表現で表す前言語的コミュニケーションを母親が理解できるかどうかは子どもの気質と母親の心の理論に拠るとしている。心の理論とは、人の気持ちを推測する能力であり、言語理解やコミュニケーションなど我々の発達に欠かせない能力である(Gopnik&Astington)¹⁴⁾。そして人の心の理論には個人差があることが示唆されている(Keating&Heltzman)¹⁵⁾。このように考えると、子どもからの身体的表現の意味を理解できず、子どもとの相互作用を成すことが困難である母親は少なくはないだろう。前言語的コミュニケーションの時期、母親は子どもの身体表現や音声から子どもの要求を推測し、要求されることに的確に応える。その行為が母子間の相互作用を生み出し、コミュニケーションの基礎を築いてゆく。そのように上手く母子間のコミュニケーションを築いていく親子もいれば、一方で、子どもからの要求が分かりづらいものであったり、子どもの身体表現や音声から読み取ることが苦手な母親もいる。岸本¹⁶⁾は、子どもを理解できない母親は、情動共有経験を得ることが出来ない状況に陥るが、理解できるように母親が変化すると母子間に情動共有経験がなされ、愛着を形成するに至ると述べている。串崎・田中¹⁷⁾は、自閉症児の情動共有を促す介入方法について検討し、感覚運動遊びや身体的なアプローチなどの情動を刺激するような媒体をもちいることで、感情表出が見られたと述べている。Aの母親のくすぐるという関わり方はその意味においても、母親がAの気持ちを理解するに至るための重要な関わりであったことが分かる。

5. Aの気持ちの代弁

母親はAの気持ちを代弁し「やったー」「せいかーい」の言葉を使っていた。それは、A自身が成功し、実際にその体験している成功をAが目に見えているときに、伴ってかけられた言葉である。

ASD児は共同注意の獲得に困難があることが知られている¹¹⁾。よって、Aから自発的に母親の注意を引く

ことは難しいが、Aが注目している場面や物に対して母親も注目し、語りかけることは可能である。

Tomasello and Farrar¹⁸⁾ は、健常児の子どもが品物に注目しているときに、その品物の名前を教える方が、大人がその品物に子どもを注目させ、その品物の名前を教えるよりも子どもにとっては教示効果が高いことを報告している。大人主導でことばを提示するよりも、子どもの注意を読み取り大人が言葉を提示する方が、言葉が子どもに入る可能性は高いのである。Aが自分の成功に注目しているときに、母親が「やったー」「せいかーい」と言葉を伴わせることでAの中にその言葉が徐々に根付いていったのだろう。

6. Aからの働きかけには必ず返す

やまだ⁷⁾ はボールを言葉に例え、「会話はことばのキャッチボールである。」と述べ、「ボールのやりとりでは、『行く』と『来る』が別々の行動ではなく、『逆転して繰り返す』ことでむすびつけられねばならない。(中略)二つの行動は『行っても返って来る』あるいは『やって来たら返す』という往復運動としてむすばれる。そのルールがわからないと安心してボールを手放すことができない。」としている。

Aは母親に対して、まだ言葉にはなっていない音声で働きかけるようになった。それはAから母親に対してボールを投げ始めたということである。これまで母親からの一方向の働きかけであったことが、ようやくAから働きかけるようになった。Aから投げられたボールは言葉にはなっていないが、母親はその音声を模倣し、理解しているふりをしてAに投げ返している。ここで重要なことはAが何を母親に伝えたかたかではない。やまだは無藤¹⁹⁾ が行った、児童の対人的方略の研究を受け、言語の通じない子ども同士が遊ぶときに必要なことは言葉の内容を理解することよりも理解しているように見せ、やりとりを継続することであると述べている。つまり、Aの言葉にならない音声を理解しようと立ち止まり、このキャッチボールを中断させてしまうことよりも、Aの音声の意味を理解できずとも、Aが母親に対して投げかけてきたその行動そのものを受け入れ、返すことでAはやりとりを覚える。そして言葉を知ったAは何度も母親の名前を呼ぶ。そこには伝えたいことがあるというよりも、呼べば母親が返してくれるという安心感とそのやりとり自体を楽しむAの姿がある。

7. Aに対する細やかな観察

Aの不快感の原因が分からないと大変であるということから観察に集中するようになった母親であるが、この観察なくしては、これまで見てきたような関わり

方も行えなかったであろうし、Aの言葉の発達もこれほどの伸びを示さなかったかもしれない。

母親の観察には2つの特徴があった。1つは、省察である。母親の「過ぎてしまった後でも、あのときのあれはなんだったんだろうって後で振り返ってそれを分かるまで」という語りにあるように、その時の観察に留まらずに、その時のAの様子を思い返し、気付きを探している。

吉田²⁰⁾ は、保育者は熟達するにつれ、子どもの表層の行動だけではなく、行動の意味についての気付きを得るようになってきている。Aの母親は、「あれはなんだったんだろう」とAの行動の意味を知ろうとしている。Aの母親はAを観察することにより、熟達した保育者と同様の観察力を身につけていったのである。また母親は「必ず何にでも理由がある」と語っている。その探究心とも言える姿勢も熟達した保育者に見られるような観察力を母親が得られることの助力となったのではないだろうか。

VI 総合考察

Aと母の関係は、最初は母親からの一方向のものでしかなく、健常児の発達とは異なっていた。しかし、母親の根気強い働きかけにより、徐々にAからの働きかけが見られるようになり、母親と関係が作られるようになると、今まで関わろうとしなかった弟からの働きかけにも応じることができるようになった。そして他者と交わることができなかったAが、母と弟と「うたう」ことを通して交わることができるようになった。この、共に歌う行動に見られる、お互いの動きやリズムを受け入れ同調する動きは、生後間もない乳児に見られるものである²²⁾。それはコミュニケーションの最も初期に現れる母子間の相互作用である。Aはここに至りその関係を築いた。ASDゆえの順序性の違いはあるが、その関係が言葉の発達にとって不可欠であったからこそ、遅れてではあるが、出現するに至ったのであろう。

本研究は1つの事例研究に過ぎないが、この事例から言葉の発達に効果があった母親の関わりが見えてきた。その関わりを言葉の発達に関わる者にとって有益な視点として扱えるよう一般的な言葉にしたい。

まず、「マザリーズ・Aの理解しやすい言葉を使った語りかけ」であるが、これはAに母親へ注意を向け、母親の気持ちや意図を理解してもらうための関わりであった。子どもに理解されようとする関わりである。次に「Aをくすぐり笑顔を引き出す」は、Aの気持ちを理解したいがために、Aから情動を引き出す関わりをしている。つまり、こどもの気持ちを理解し

ようとする関わりである。そして、「Aの気持ちの代弁」。これは共同注視が困難であったAと同じモノを共有しようとした母親の関わりであり、母親はそのためにAの視線の先に注目し、注目したモノについて代弁していた。こどもの視線の先を共有しようとする関わりである。次の「Aからの働きかけには必ず返す」は、キャッチボールのように言葉を上手く受け止め、Aがまた投げたいと思うように返すことである。ここで、返さなかったり、嫌々投げ返しては、Aはまた投げたいとは思わないだろう。つまり、子どもが話しかけたいと思えるようにすることである。最後に「Aに対する細やかな観察」であるが、母親はAの「泣き」の原因は必ずあると信じ、その原因を探るために観察を行い始めた。それは、子どもの行動の理由を知ろうとするといい換えることができるだろう。

この5つの視点を以下の表にまとめる。

表1 言葉の発達に関わる視点

-
- ・子どもに理解されようとする。
 - ・子どもの気持ちを理解しようとする。
 - ・子どもの視線の先を共有しようとする。
 - ・子どもが話しかけたいと思えるようにする。
 - ・子どもの行動の理由を知ろうとする。
-

Aの母親は具体的にはくすぐりや代弁など5つの方法を行ってきたが、その5つの関わりの根底にあった視点はこのようなことであったと考える。以上、これらの考察から子どもの言葉を育てる者の関わり方として、表1の5つの視点を持つことが重要であることが示唆された。

文献

- 1) 中川信子(2013), 子供の心と言葉の育ち—親子をともに支援するために—, 小児耳, 34(3), 234-238
- 2) 日本精神神経学会 精神科病名検討連絡会 (2014), DSM-5 病名・用語翻訳ガイドライン(初版), 精神神経学雑誌, 116(6), 459-457
- 3) 杉山登志郎(2014), 発達障害から発達凸凹へ, 小児耳, 35(3), 179-184
- 4) Bates, E. Camaioni, L et al. (1975), The acquisition of performatives prior to speech. Merrill Palmer Quarterly, 21, 205-226
- 5) 毛利真紀(2002), 子どもの前言語的コミュニケーションと母親の関わり行動の関連: 応答的関わり・始発的関わり観点から, 九州大学心理学研究 3, 145-155
- 6) 後藤姉奈(2015), 長期療養中の関節リウマチ

患者における病いの経験とその味, 三重看護学誌, 17, 45-51

- 7) やまだようこ(2010), ことばの前のことばうたうコミュニケーション, 新曜社
- 8) 児玉珠美(2015), 0歳児におけるマザリーズの効果に関する1考察, 名古屋女子大学紀要(家政・自然編), 61, 261-270
- 9) 松村京子(2006), 乳児の情動研究: 非接触法による生理学的アプローチ, ベビーサイエンス 6, 2-14
- 10) 陳省仁(1986), 新生児・乳児の「泣き」について: 初期の母子相互交渉及び情動発達における泣きの意味, 北海道大学教育学部紀要, 48, 187-206
- 11) Kirkland, J.(1985), Crying and babies ; helping families cope, London: Croom Helm
- 12) 佐々加代子(1985), 白乳幼児の言語発達に関する臨床的研究III: 言語発達における母子関係の発達段階と信号系の検討, 白梅学園短期大学紀要 21, 29-46
- 13) 菊野春雄(2015), 環境と経営: 静岡産業大学論集, 21(1), 1-7
- 14) Gopnik, A. & Astington, J.W. (1988), Children's Understanding of Representational Change and Its Relation to the Understanding of False Belief and the Appearance-Reality Distinction, Child Development, 59, 26-37
- 15) Keating, C.F. & Heltzman, K.K. (1944), Dominance and deception in children and adults: Are leaders the best misleaders? Personality and Social Psychology Bulletin, 20, 312-321
- 16) 岸本由紀(2013), 広汎性発達障害児の愛着形成のプロセスに関する研究: 母親と子どもの情緒的交流と子どもの児童期の対人関係に焦点を当てて, 教育実践総合センター紀要(31), 43-58
- 17) 串崎 真志, 田中 友梨(2009), 自閉症支援における情動共有の意義. 関西大学人権問題研究室紀要, 58, 1-10
- 18) Tomasello, M. and Farror, M.J. (1986), Joint attention and early language. Child Development, 57, 1454-1463
- 19) 無藤隆(1986), 文化的学習の理論を目指して, 日本児童研究所「児童心理学の進歩」, 金子書房
- 20) 吉田満穂(2015), 保育経験年数からみた気付き体験の特徴, 岡山大学教師教育開発センター紀要 5, 9-18

謝辞

貴重な経験を語って下さったA君のお母様に心より感謝申し上げます。

Language Acquisition Depending on Interaction from Mother: A Case Study of Developments in Prelinguistic Communication

Mariko KONDO*, Sawako SASAKI**, Asagi HOSHIYAMA***

* Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College

** Distance Education Graduate Course, Meisei University

*** Department of Education, Meisei University

Abstract

We studied the acquisition process in a child with Autism Spectrum Disorder (ASD) to have the first word depending on the mother's initiative. Following developments in prelinguistic communication we examined the relevancy between the acquisition process and their interaction. We have found that it is effective to lead the language development based on these five factors, 1)Acquisition of children's comprehension, 2)Understanding children, 3)Attention and Sharing children's insight, 4)Being in favor with the children, 5)Knowing the background of children's behavior.

Keywords : Prelinguistic communication, Language acquisition, Mother

